



# 「知への初々しい憧れと畏敬の念」

～子どもの学びを支える教師力・学校力の強化～

校長通信第110号

令和3年12月17日

## 食肉市場・芝浦と場のお話

12月15日（水）、東京中央卸売市場 食肉市場・芝浦と場で職員として働く高城順様をゲストティーチャーとしてお招きし、肉の製造と職業差別について、授業としてお話を頂戴しました。高城様は、部落解放同盟東京都連合会品川支部の支部長も務められております。本授業は、体育館において第5・6学年の児童を対象に実施しました。本来であれば、東京中央卸売市場の「お肉の情報館」に出向き授業を受けるのですが、コロナ禍ということもあり、高城様にご訪問いただきました。

本授業のねらいは、実際に生きている牛や豚がどうやって食肉となるのか、その作業工程の理解に加えて、その作業をしている方への差別が実際にあり、その差別の不合理性に気付くことにあります。

始めに、食肉の製造工程をDVDで視聴しました。ここでは、牛の健康チェックをする検査員の様子、生きている牛を気絶させる様子、血を抜く様子、皮をはぐ様子、内臓や枝肉に分解していく工程を確認しました。BSE検査をする様子も確認しました。子どもたちは、はじめ生きている動物からの解体作業に驚きを隠せない様子でした。「うわあ。」とか「ひどっ。」などの言葉が出ていました。顔を伏せる子どももいました。この反応は、高城様の想定内です。子どものこの反応は当然のものともいえます。学校や家庭では、「命を大切に下さい。」と教えられていますから。



DVD視聴後、高城様のお話です。「お肉が好きな人？」という高城様の一番初めの問いに対して、子どもたちは、ほぼ皆が手を挙げました。続けての問いは「DVDを見て、残酷だと思う人？」。これは意外にも、それほど手が挙がりませんでした。高城様は、「牛を殺すのには、理由があります。お肉を、みんなが好きなお肉を作るからなんです。」「私にとっては、仕事です。当たり前作業なんです。当たり前の仕事なんです。私たちのことを差別する人たちがDVDでも流れました。肉を食べることは、自然の当たり前の営みです。正しい知識がないから、差別するんです。正しく理解してほしい。」旨のお話をいただきました。

お話の後、子どもたちはグループになり、感想や質問事項を協議しました。そして、質問タイム。高城様への質問です。たくさん子どもたちが手を挙げ、質問をしました。特に高城様が聞いてほしい質問は「牛を切っている時、どんな気持ちですか。」という、6年生の質問でした。高城様の答えは「かわいそうとかひどいとかは、全く思いません。仕事なんですから。かわいそうなんて思わないですよ。ただ、強いて言うならば、おいしいお肉にしたいなとは思っているかも。」でした。質問した子は、「そうですよね。」と納得でした。本音の質問と本音の答えに、子どもたちは納得でした。

いわれのない差別は、真にあってはならない。子どもたちには、「自分の大切さとともに、他の人の大切さを認めることができる」人間に育ってほしいと思います。どんなに勉強ができて、どんなに格好良くても、どんなにお金をもっている、心がダメなら何にもなりませんから。

### 【感想】一人ずつ

#### ○6年生

映像を始めに見た時、かわいそうや残酷だなと思ったけれど、今日のお話を聞いて、やっぱりかわいそうだけれど、人間が生きるために必要なことと思いました。それに、おいしいお肉を食べられるようにしてくれている人を差別するなんて、なぜなんだろうと思いました。

#### ○5年生

牛や豚を失神させるところは衝撃でした。びっくりしました。また、お肉になる工程がすごくよく分かりました。おいしいお肉を食べられること、作っている人に感謝したいです。人権は傷付けてはいけません。